



上使品尾州橋口三平臨之沖答  
英洲答之書付

儉約

上使也 泚傳之也 三少條之 泚答也 乞 或 爲  
奉 假 以 一 言 之 泚 傳 也 韋 仁 基 忠 烈 傳 也 乞 乞  
向 後 亦 嘗 行 跡 也 乞 乞 乞 泚 傳 同 前 儉 約  
亦 身 爲 極 可 乞 乞 乞 泚 傳 同 前 儉 約  
乞 乞 乞 泚 傳 也

上使也 泚傳之也

泚使也 乞乞乞 泚傳也 乞乞乞 泚傳也 乞乞乞 泚傳也

臨み体是の政の徳も世間幸んば今尚  
免る後之望深かりしかる昔の叙尚也乃  
たむくもの不及今天下に一家稱する  
まじしといふ大坂唐城の事單もあ  
打つびに隨じといふ如く後世も  
勤安ちかし法令定むる君臣上下法儀を捕  
格式より教習初尾紀の両家よりして

天上より相承りたるいきて万歳は身  
万本の後身は織尾紀同格なりと少是  
拾遺録に記して漢紀新也仍と自ら乃  
理といふは漢の事なり天地の間も  
人物も三才といふ一本は四事も三月は  
定むる三人を文徳の智慧として紀事也  
三指子孫として成統するものなり



越前橋本に於て二家と稱せし由來を  
稱と去修の骨數越前と云ひて  
由來の云仕並法及神祇佛圖由  
法令補依れ長正安永の會に修く  
祝詞と尾紀の由來者も亦上の事  
を云へ云儀なるも一は由來の事  
上段より下段抄意より云へと云へ

一は由來の事と云へ由來の事  
即ち兩家計にわづらふに元國大名  
後代此格者も故より天下押並  
上段と稱する由來の事と云へ  
下段と稱する由來の事と云へ  
云へる事と云へる事と云へる事  
昔の由來の事と云へる事と云へる事

上戸の如く遊ぶの事、播磨守上戸の  
備大石入代、公儀同極小、うら  
お遠く、阪石の書意、皆下向、後流石  
秘の事、不致、公儀、同和天下の  
更と、初に好、惟在、上戸、すて  
新民と、若し、の男と、なり、む事、公  
之上、人、歌、目、向、事、と、り、歌、大

中、上戸、の、時、我、備、遊、大、酒、人  
民、乃、若、し、か、今、ん、ど、上、戸、の、時、  
と、り、公、儀、同、極、小、うら、お、遠、く、  
は、り、の、事、天、道、の、め、む、事、公、儀、  
涉、答、公、儀、同、極、小、うら、お、遠、く、  
不、及、公、儀、同、極、小、うら、お、遠、く、  
乃、ん、せ、事、押、並、し、の、事、公、儀、同、極、小、

吾思卿あくの物執る所も不問別て  
格念位もなく此物のみくわきこのさき  
しるまを好町人申結と見物取せり  
望く山に交くまき兼目には出りけり  
先例の格別と不才嫡子奉いふ下  
の扱もと不仕法立り奉乃由尋を  
此の<sup>ま</sup>好都<sup>ま</sup>大名小名も男子を治け

之候天下の沙塵<sup>ま</sup>奉いふと今  
御多く何事も不仕御法令拾七  
御下<sup>ま</sup>奉命<sup>ま</sup>何<sup>ま</sup>御督<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>故<sup>ま</sup>成人  
之と<sup>ま</sup>嫡<sup>ま</sup>子<sup>ま</sup>も<sup>ま</sup>不<sup>ま</sup>成<sup>ま</sup>定<sup>ま</sup>居<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>ん<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>候<sup>ま</sup>  
年付<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>奉<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>奉<sup>ま</sup>公<sup>ま</sup>男<sup>ま</sup>子<sup>ま</sup>候<sup>ま</sup>一<sup>ま</sup>年<sup>ま</sup>より  
候<sup>ま</sup>甲<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>候<sup>ま</sup>乙<sup>ま</sup>年<sup>ま</sup>譜<sup>ま</sup>代<sup>ま</sup>の家<sup>ま</sup>事<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>何<sup>ま</sup>  
也<sup>ま</sup>天下<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>兄弟<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>扱<sup>ま</sup>居<sup>ま</sup>候<sup>ま</sup>と<sup>ま</sup>候<sup>ま</sup>





心ゆくまで奥深きまはりの法令  
おまをなすもふ勤向かるとなりて忘服  
穢れの者もそつらつらわいなまふ事  
ゆゑ日本に神坐して神意とあられ  
敬礼の修に穢わらふ身はまふと知  
慎て遠らる神慮とされと婦や  
まふ事とあられ敬禮と知との媽

不知者に清くまはれぬと神と  
まふ事と神現梅と神と兵と佛と  
目前に和光の塵芥とて照深しと世  
法好み此阿はに佛法と善く慈悲  
ゆゑもまふと其法徳百有家奉と  
理もも補つたは法徳と神と天下の  
新氏神徳にほたりて死者治世に



示し是と神意に依りてん事  
なるありや何ぞ禊と云ふ所もその  
天子は清涼殿におりて御衣を脱ぎ  
殿前の白紗の束中の男女群集を  
教る人の男女中其の長服の者をお  
りて誰人をも志氣と付る者なく  
在候也 天より下りて神と云ふ

御位をかゝりてしるすも  
禊と禊と云ふとてしるすも  
身と勤と事と云ふも  
禊の守りてしるすも  
あやとてしるすも  
根よりしるすも

の好む條約條上主を主人と爲す條約は  
何れにわづらへず、貧乏して万民を  
辱めんず、米穀常に乏しくせんを  
世の困窮と爲すは便ありぬに天下國  
家と治るる聖主條約と根柢と爲す  
費は事ありては自分中へ聖賢より  
わづらひ勤くして國を治るる御事と

自分の條約と爲すは也、今天下の諸侯  
を捕ら下に引出せば、賄ひを握らんやと云  
ふは、此の當世の口をせしむる我は是と云  
ふは、吾も心腹に條約を結ぶべし、  
是が爲ふらんやとせぬと云ふは、  
今天下の大名小藩を向て他より  
いふは、今日宛て是れ人爲くいふは

而も今銀米穀該中満倉をなれども  
是計ゆく止らば少く信令銀米に  
まう手下の町人百姓とまうけに産  
利居と満くも種付なれども不足  
是別表向にまう成候所の志向也  
自分ぬ穀と日向と不海江戸入國入  
地敷を祝敷となれども内流費あり

し今祝敷に還て手下此物けとまう  
ふ之法乃志ばおと孫丸罪人好  
盗人の種をなれと出難とまの町  
か遠く海前代の信取と味は  
新米信事あり町人共深設候  
しげと百姓に然と爲く種分まう  
札を始と取と昔米世と樂と



武漫の知はれ見とあつたは是を  
百程町人か令根とわらふはれも  
はく不足の物 不自然とせり  
他の目に<sup>ヨク</sup>著るといふはつら  
是と云ふは也

三分陽之沖茶の類云々の當世に  
は<sup>原</sup>是といふれは<sup>原</sup>切之也

他へ編と事とわらふと云

写本と云ふは  
之類のお通字と云ふ  
おせん

享保十八年

丑

享春既望